

今回までの調査で黒部川流域の全域を調査したことになるが、黒部川流域のニホンザル分布の特性として、個体群の分布限界域は黒四ダム上流の東沢谷付近（標高1500m）にあるものの、群れが隣接しながら連続分布する限界は仙人ダム付近（標高900m）までで、上流域ほど生息密度は小さくなる。一方、上流域で、隣接せずに離れて分布する群れの間でも、群れ外オスの移動（9月14日、黒部別山谷・標高1150mで観察）により、交流はあるものと推定される。

(2)の調査結果

85年12月から86年1月にかけての12日間、黒部川流域の宇奈月温泉と、それより上流の猫又発電所までの12kmの区間で調査した。過去の調査で観察した17群のうち、今回観察できたのは9群である。そのうち、宇奈月温泉の上流側を逆動域にしているOM群の過去3年間の個体数は60頭（84年）60頭（85年）61頭（86年）であり、ほとんど増減していない事がわかった。

課 題 4

ニホンザルにおける餌入手に関する情報の伝達過程の実験的分析 (2)

武田庄平（阪大・人間科学）

ニホンザル集団における情報の伝達と獲得に関わる重要な行動として好奇行動がある。その個体間での影響・促進関係の実験的分析を行った。好奇行動のひとつとして、昨年度同様「のぞき行動」を取り上げた。実験対象集団は昨年度同様若桜ニホンザル放飼集団（京大霊長研）。実験装置と手続きも昨年度と同様である。昨年度の実験結果から好奇行動の影響・促進に未成年雌が大きく関わっていることがわかった。そこで本年度は、この未成年雌のうちより、優劣順位・血縁個体の多寡により4個体を抽出し、標的個体（「のぞき行動」をすると視覚刺激が呈示される個体）とした。実験は、1セッション1時間とし、各標的個体につき30セッションずつ行った。

実験の結果、以下のことが明らかとなった。①一般に雄より雌、成体より未成年の方が、好奇行動への影響・促進が顕著である（昨年度も同様の傾向がみられた）。②標的個体の優劣順位は、好

奇行動の影響・促進にはあまり関与していなかった。③標的個体の好奇行動の影響・促進関係は、血縁個体の多寡にかかわらず、むしろ非血縁個体との間にみられ、④その関係は特に標的個体のpeer-groupの個体との間においてみられた。⑤視覚刺激に対する反応によって標的個体は2つのタイプに分かれた。つまり、刺激に対してドラスティックな反応を示さず持続的に「のぞき行動」を示したタイプと、刺激に対し明らかに驚いた反応を示し装置よりとびのき、以降も「のぞき窓」に対し非常に敏感な反応を示し続けたタイプとである。⑥これら二者のうち後者のタイプに属する個体の方が、集団成員により高い影響・促進作用をもたらした。以上の結果及び昨年度の知見から好奇行動の影響・促進関係において雌の果す役割が解明された。今後、雄についての知見を得ることで、ニホンザル集団における好奇行動の影響・促進関係の総合的理解が得られるであろう。

ニホンザル文化的行動における伝播方法のオトナとコドモの違いについて

樋口義治（愛知大・教養）

ニホンザルに文化的行動がみられ、その行動が学習によって伝播されることは、従来良く知られてきた。しかし、その学習方法については、観察の方法によるのであろうことがいわれてきた。

樋口は、1979年以来、群れの中へ、押すとエサの出る自動販売機類似の装置を持ちこみ、群れの各個体がこのパネル押し文化的行動をどのように獲得するかを研究してきた。その結果、ニホンザルの群れでは、多く、観察的方法によるよりは、局部的強調と試行錯誤法の組み合わせによって獲得されることを明らかとした。

ところがこの過程の中で、オトナのサルは上記の方法によるが、コドモ、特にアカンボのサル達がこの方法ではないような印象を受けた。今回、目標をこのコザル達にあて、研究を行った。すなわち、生後2才までの、まだ母ザルとの関係を強く維持しているコザル達を選び、この母子のペアに限定して実験を行った。

その結果、コザルは母ザルの行動をいわば、オウム返しのように真似をする傾向を見つけた。ただし、この行動はすぐにパネル押し行動には結び